巻頭言

# 持続可能な農業の実現に尽力

佐藤工業株式会社　代表取締役社長　平間　宏

仕事で農業土木（農地の整備）に出会ったのは三〇年以上前のことです。兵庫県三木市のゴルフ場造成工事で、私の担当は離接する外周道路の設計施工でした。初めての分野でわからないながらも「道路構造令」を片手に必死で取り組みました。ゴルフ場の造成ですから、山林はもちろん近くには田畑も広がっています。一部工事のために田んぼも借地します。兵庫県の三木といえば酒米『山田錦』の産地として有名で、当時、『夏子の酒』という漫画が流行っていました。「ここで酒米が取れるのか」と知り、感慨深く思ったものです。大学生だった時、日本酒の種類といえば特級、一級、二級というイメージ。この物語で精米歩合により純米、純米吟醸、純米大吟醸ができることを知り、興味が沸いたことを覚えています。工事にあたっては、田んぼを知らなくてはなりません。田んぼには表土という重要な表層の土があることや、米の収穫量は一反（一、〇〇〇㎡）で五〇〇kgという基礎知識からでした。工事完了時は、鋤取って保管していた表土の復旧をしました。人力で石を拾い、平坦性を細かくチェックするなど、元の状態に戻すのに、丹念に労力をかけて引き渡しを行いました。

さて現在、世界人口は八二億人、近い将来一〇〇億人に達するといわれ、全世界的には食糧不足となるとの予測があります。日本人口は減少する見通しですが、食料を輸入に依存している日本も例外にはなりません。食料自給率を上げるためにも農業の大規模化、また農業就業人口の減少対策としての自動化が必要です。その例が農地区画の大型化です。先般、弊社は富山県の水橋で七haの農地整備の工事を行ったのですが、何と七〇枚以上の区画を五枚の区画にするというものでした。最大区画二・四ha、これだけ大きな田んぼの平坦性の確保ができるのは建設機械やセンサーなどの技術革新の賜物です。一方、農業技術も進化しています。先日、スタートアップの『緑の革命』と題する取り組みを聴講する機会がありました。これは増加する世界人口に対応すべく食糧増産の新たな取り組みについての紹介です。環境記憶種子による収穫量の増加、ＳＤＧｓとしての化学肥料、化学農薬の効率化など非常に興味深い内容でした。特に植物にストレスを与えて栽培することで、遺伝子の働きをコントロールし、育ちの良い種子に改良するという取り組みに関心を持ちました。ただし、植物は個々によって許容できるストレスは違うため、最適なストレスを見つけ出すことが重要であるということでした。人も適度なストレスは仕事の能率を上げる働きがあると聞きます。強すぎるストレスは心身に負担をかけますので、ストレスを上手にコントロールすることが大切だと思っています。

そして現在、地球温暖化などによる激甚災害が増えて私たちの生活や暮らしを脅かしており、改めて建設業の役割を感じているところです。時代の変化とともに、新たな課題も発生します。建設業の原点を見つめながら、常に緊張感を持って課題解決のため立ち止まることなく、持続可能な農業の実現に尽力していきたいと考えています。